

「TEADA No. 5 < 2009 April >」 (学校図書) 掲載
新学習指導要領解説連続講座 「新しい生活科の姿」
第1回 改訂の全体像

上越教育大学大学院 木村吉彦

はじめに

平成20年3月、新しい学習指導要領が告示されました。平成元年の学習指導要領に生活科が新設されてちょうど20年。生活科もようやく成人を迎えたことになります。同時に、今回の改訂がこれからの生活科の10年を決めることになります。

これから4回にわたって、生活科の改訂について解説しますが、第1回目としましては、まずその全体像を示したいと思います。

今回の改訂では、教科目標はそのままですが、学年目標が一つ増え、「自分のよさや可能性に気付く」ことが改めてクローズアップされました。これは、「自立への基礎を養う」ために大切な「自分自身への気付き」の重要性を再確認したことを意味します。私たちは、「できるようになったぼく・わたし」「わかるようになったぼく・わたし」を子どもたちにしっかり自覚させ、子どもたちの「自己肯定感」と「生きる自信」をさらにはぐくんでいかななくてはなりません。「生きる力」育成の切り札としての生活科の面目躍如といったところでしょうか。

また、内容には新たに(8)「生活や出来事の交流」が加えられ、合計9内容になりました。これは、生活科が最も重視する「具体的な活動や体験」をその場限りのもので終わらせることなく、言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して、体験したことを他者と情報交流することをめざしたものです。言葉などを使った言語活動は、思考を促し、他者とのコミュニケーションを成立させ、子どもたちの情緒を安定させることにつながります。こうしたことから、生活科における具体的な活動や体験の様子などを、身近な人々と伝え合う活動を行うことで、かかわることの楽しさが分かり、多くの人と進んで交流していこうとする子どもの育成をめざしたのです。

さらに、内容及び内容の取り扱いについて改善された事柄として、5つ挙げることができます。それは、①気付きの明確化と気付きの質を高める学習活動の充実、②伝え合い交流する活動の充実、③自然の不思議さや面白さを実感する指導の充実、④安全教育や生命に関する教育の充実、⑤幼児教育及び他教科との接続、の5項目です。以下に、詳しい内容を説明します。

1. 目標の改善

①教科の目標

教科目標については、低学年の発達特性、生活者の視点からの対象のとらえ方、生活上必要な習慣や技能の育成等を踏まえ、現行通りです。

②学年の目標

学年の目標については、自分自身に関する目標が加わり、3つの目標から4つに増えました。第1は、主に自分と人や社会とのかかわりに関するもの（社会認識）、第2は、主に自分と自然とのかかわりに関するもの（自然認識）、第3は、自分自身に関するもの（自己認識）、第4は、生活科特有の学び方に関するもの（学習の方法や表現方法）です。答申では、自分の特徴や可能性に気付き、自らの成長についての認識を深めることが重要である旨が提言されており、自分自身に関することを一層重視するために自分に関する目標(3)が加えられたのです。これは、「自分自身への気付き」をこれまで以上に大切にすることが、生活科本来の趣旨からしてより明確にされたことを意味します。

さらには、目標(1)では「地域のよさに気付き」、目標(2)では「自然のすばらしさに気付き」、目標(3)では「自分のよさや可能性に気付き」という言葉が加えられ、学習活動において、一人一人の子どもにどのような認識が育つことが期待されているかを明確に示しました。また、目標(4)では、生活科における表現の価値について、思いや願いを自己表出すること、表現によって思考を深めることの両面があることが示され、「気付き」と同時に「考える」ことの大切さが強調されました。

2. 新しい生活科のめざすもの

①気付きの明確化と気付きの質を高める学習活動の充実

今回の改訂により、全ての内容において、具体的な学習活動や学習対象を示すとともに、学習対象とかかわったり学習活動を行ったりして、関心をもつこと、気付くこと、分かること、考えることなどの大切さが明確にされました。

まず気付きとは、i)対象に対する一人一人の認識であること、ii)児童の主体的な活動によって生まれるものであること、iii)そこには知的な側面だけでなく情緒的な側面が含まれること、iv)気付きは次の活動を誘発するものであること、というように明確な定義がなされました（『解説』4頁）。

また、内容の取扱いでは、活動や体験によって生まれる気付きを基に考えるための具体的な学習活動を例示しました。すなわち、低学年の児童の発達特性としては、比べて考える、分類して考える、関連付けて考えるなどが一体的に行われることから、見付ける、比べる、繰り返す、試す、たとえるなどの多様な学習活動を行うことが例として示されたのです。（『解説』34頁）

②伝え合い交流する活動の充実

生活科は、具体的な活動や体験を重視しており、今後も活動や体験の重要性は変わりません。しかしながら、活動や体験をその場限りで終わらせるのではなく、一層の充実を図る観点から、言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して、体験したことを他者と情報交流することを目指した「生活や出来事の交流」が新たな内容(8)として位置付けられました。既に述べたように言語活動は、思考を促し、他者とのコミュニケーションを成立させ、情緒を安定させることにつながります。その中でも、特に、言語活動によって他者と交流して認め合ったり、振り返りとらえなおしたりすることが重要です。

このように、子どもたちが、身近な人々と伝え合う活動を行うことで、かかわることの楽しさが分かり、多くの人と進んで交流していこうとする子どもの姿が期待されているの

です。

③自然の不思議さや面白さを実感する指導の充実

低学年の子どもは自然事象に高い関心を示す傾向にあります。これまでの生活科でも、自然事象を対象とした学習活動は行われてきました。今回の改訂では、科学的な見方・考え方の基礎を養う観点から、自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を取り入れることを大切にすることとしました。学年の目標(2)に「自然のすばらしさに気付き」を加えただけでなく、内容(6)「自然や物を使った遊び」の中に、身近な自然や物を使って遊びや遊びに使う物を工夫してつくること、自然の不思議さに気付くことを示し、科学的な見方・考え方の基礎が養われることを期待したのです。

④安全教育や生命に関する教育の充実

これまでも生活科では安全教育や生命に関する教育を取り扱ってきました。今後も、子どもを取り巻く社会の急激な変化に対応するという視点から、安全教育や生命に関する教育を一層重視することが強調されました。

従前も内容(1)「学校と生活」の中で、安全な登下校ができることをめざしていましたが、今回の改訂では、学年の目標(1)に「安全で適切な行動」を加えるとともに、内容(1)「学校と生活」に「その安全を守っている人々」を加え、地域や登下校の安全に関する学習活動が一層充実するようにしました。

また、生命に関する教育については、これまでも内容(7)「動植物の飼育・栽培」を2学年にわたって取り扱うこととしてきたのですが、今回は、生命の尊さを実感を通して学ぶという観点から、内容の取扱いの中に「継続的な飼育、栽培を行うようにすること」の言葉が加わりました。

⑤幼児教育及び他教科との接続

幼児教育との接続の観点から、幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科等との関連を図る指導は引き続き重視されています。特に、学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムを「スタートカリキュラム」として改善することが盛り込まれました。

また、生活科の各内容と第3学年以降の社会科、理科の内容を視野に入れ、見直しを行いました。内容(3)「地域と生活」で、地域で働いている人を対象とすること、内容(4)「公共物や公共施設の利用」で、公共物や公共施設を利用することを明確にしたり、内容(6)「自然や物を使った遊び」では、自然の不思議さに気付くことを明示しました。これらにより、第3学年以降の社会科や理科へのつながりがより分かりやすく示されたのです。

<参考文献>

嶋野道弘編著『改訂小学校学習指導要領の展開 生活科編』（明治図書,1999）

木村吉彦著『生活科の新生を求めて～幼小連携から総合的な学習まで～』（日本文教出版,2003）

木村吉彦編著『小学校新学習指導要領の展開 生活科編』（明治図書,2008）